

伊藤信孝

マエジョ大学 客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では次回に続き、人材育成 (**Human Resources Development**) について記す。ここでは特にモチベーションについて話す。低いモチベーションで入学してくる大学生に如何に、勉強の必要性、重要性、どうすればやる気を起こさせることができるかを教授することは至難の業(?)にも見える。しかし、だからといって何もせずに野放しにしておくことは大学の教員としての役割、責任逃れと言われても致し方無い部分もある。入学してくる学生の大半は、大学が示すカリキュラムに沿って、忠実に授業や実習、大学が示す研修旅行や各種プログラムに忠実に参加し、規定の単位を履修しておれば自動的に卒業ができて、就職先も容易に決まると考えている。しかし、この考え方は間違っている。筆者の意見を披露しておく。

学生個々の個人的な背景はともかく、専攻(専門)分野を決めて入学してきた以上は、卒業するには、その専門分野で決められた所定の単位を修得する必要がある。しかし、この基準は専攻した専門分野に必要な基本的学力を履修したと言う証明にはなるが、卒業後の就職までが保証されたわけではない。就職は職業選択の自由が示すように、専門分野に拘わらず関係はない。ただ専門分野の知識を考えると専門分野と就職先は同じ関連分野である方が、採用する側から見ても有益であるので、大方の場合は専門分野を考慮した就職活動になることが多いし、採用側も求人において同じ専門分野の学生の採用を考慮して大学に求人案内を送付してくる。しかし、必ずしも専門分野への就職が100%保証される訳ではない。その昔、筆者の属する農業機械学科の卒業生の就職状況を見て、農芸化学の学部長が次のような事を言った。当時折しもバイオテクノロジーや生物工学、食品化学、などバイオのニュースが巷に溢れていた。また米国の関係学会である 米国農業工学会 ASAE (**American Society of Agricultural Engineers**) でも学会誌 (**Journal**) の名前 **Resources** を付け加え、時代が食料生産に特化した農業の分野にとどまらず、広く資源という分野をも対象とすると言う捉え方に移行した。三重大学も大学改組の波の中で、農学、生物、化学分野への明るい未来が宣伝されていた。一方、物理、工学系は環境破壊分野でもあるかの如く、世間の空気は学内でも冷たかった。そうした環境の下で上記学部長が放った言葉は次のようである。

農業機械学科は毎年40名の卒業生を輩出しているが、本来の農業機械関係に就職する卒業生は大手企業と関連中小企業、地方や国の官公庁を含めても半数余、それよりも自動車産業やコンピュータ・ソフト関係など本来の農業機械と関係の無い所に卒業生を送っている。これはすでに農業機械が社会的ニーズを得ていない表れである、というものであ

る。しかしその2、3年も経ない間に社会状況は急変し、農芸化学の卒業生がコンピュータ・ソフト会社に就職する者の数が増え、また卒業生の多くが女性であるので就職しても直ぐに結婚して退職するという事態に頭が痛いという話を漏れ聞いた。遺伝子組み換え技術の進展に伴い、遺伝子配列を3次的に画像で表示する必要性などから、通信情報関係が分野を問わず、基本的な必修知識になりつつあることは衆知である。日常生活でも当たり前の様に誰もがスマホを有し、いつでも何処でも誰にでも、時間に関係なくピンポイントで連絡が取れる様になって来つつある。しかもワイファイ(Wi-Fi)を使う限り無料と言うおまけもある。一方、その様に言われた農業機械学科は、農業土木学科と共に日陰の分野になったかに見えたが、エネルギー・環境問題がグローバル・テトラレンマを構成するエコ・システムに、経済が入ったメカニズムが創り出す地球規模の課題の解決に農業が果たす役割が注目され、持続可能な開発(Sustainable Development)、成長、Back to the Natureの用語で警鐘を鳴らされている。上記は所詮大学の学部内でのちっぽけで、つまらない学科間の縄張り争いの意識レベルの話であった。ちなみに農業工学(Agricultural Engineering)という分野は基本的に農業機械学(Agricultural Machinery & Mechanization)と農業土木学(Soil & Water, Irrigation & Drainage)の2つから成り立っている。

ところでモチベーションの話に戻るが、今や新聞、テレビ、ラジオを見る人は少なく、若者の大半はSNS, YouTubeを見て地上波は見なくなっている。大学の講義も同じで授業といえどもメモや筆記用具を持ってくる学生は殆どいない。教員が一生懸命話をしていても、一向に顔を上げて目を合わさない。授業には遅れてくるし、遅れてきても後部座席に座し、隣の友人と私語で話をしつつ、目は常にスマホに釘付けという状況である。この状況から言えることは、講義の中身に関わらず殆どの学生は大学の授業に興味を示さない。如何にすれば興味を示すか、あるいは視線を教員の方に向けるかと言う問題に対する解決策のひとつは動画の教材を見せる事である。一時的とはいえ動画は常に目を一定に保持していなければ全体を見終わることはできない。静止画であったPPTを動画に変えることで注意を引きつけることはできるが、それがモチベーション・アップにつながるかと言えば必ずしも保証はできないが、きっかけを作ることはできる。できるだけ動画に切り替え、反応を見る。大学の施設、研究業務センターの職員への日本語教育で経験した事でもあるが、動画だけでは駄目で、選ぶテーマにも注意を払う必要がある。聴衆が興味を持つであろうコンテンツ(内容)を選ぶ必要がある。例えば、日本の先端技術とそれを組み込んだ製品の紹介、またそれらが海外でどの様な評価を受けているか、などは意外と受けられた。現在、世界的なコロナ禍の広がり、物理的な移動は基本的に禁止で、もっぱらオンラインでの対応が一般的になった。そうした背景もあって益々オンラインでのプログラムは増えつつ有り、事実増えた。決まった定時に、オンラインで講師が話をすることに加えて、ビデオ録画した教材をできるだけ多く製作、保存、用意し、いつでも、どこでも時間に関係なく視聴できる状況をつくる事で講義や授業でカバーできない部分をカバーする必要がある。この方式自体はそれほど目新しいことではないが、常に十分な量を確保準備し

ておくことで対応が可能である。教える側の教員にとっても動画作りの技法を習得する必要が生じる。若い世代ならともかく、団塊の世代ともなるとなかなか難しい。しかし尋ねることを恥ずかしがってはい前に進むことはできない。学生であろうと平気で尋ねるだけの勇気と厚かましさを持ち合わせて居なければならない。動画創りに必要な機材の入手、購入など一切合切を聴きまくり、一人で動画作りができるレベルにまでなければ、いつまでも無理を承知で助けを頼み、その都度わずかではあっても謝意を表す御礼も用意しなければならない。と言うわけで、あるとき一人の学生に頼んで2時間弱の学会での発表の動画を創るべく手助けを依頼した。指導教員にも連絡をして、快諾を得たので打ち合わせた日時にその学生は筆者のオフィスに来てくれた。筆者の持ち合わせている機材では十分ではなかったので、その学生のラップ・トップを一時的に借りることにした。そして録画が始まった。するとその学生は暇なので別室で眠っているから問題が起きたら呼んでくれと言って隣室に消えた。幾度かの講演発表の練習の甲斐もあり、本来2時間ほど掛かっていた講演時間が30分ほど縮まり、早めに終わった。その時点で録画の終了を告げ、御礼に食事にでも誘いたいかと声をかけた。これまでも一度そうしたお願いをしたが、今回も同様「いいえ、結構です。幸い弁当を持ってきているので、結構です」という返事が今回も返ってきた。これまでも2、3の学生に食事を馳走するので来ないかと誘ったが彼らは、何も考える事ないかのように、待ち合わせの時間に指定の場所にやってきた。彼らが考える「夕食への誘い」とは大学のカフェテリア（食堂）や屋台での食事というイメージで有り。それ以外の、またそれ以上のものでもなかった。正直なところがっかりした。と言うのも食事に誘われるということは、日常行きつけの大学の食堂や屋台のレベルではなく、筆者の場合は日本食のレストランで日本の食事、文化、作法、エチケット、日本語などを覚えて欲しいという付加的な想いも含んでいる。また、その変わりに食事の会話の中でタイの文化との比較、政治、宗教（特に仏教）との相違などの情報シェアの意味もある。そこまでして貰わなくてもと言う敬老 (Seniority) 精神は大切であり、それはそれで十分評価するが、できれば快く招待に応じ馳走に成り、上記した様な積極的な知識欲があって欲しい。国際的 (International, 国際感覚、国際常識) である前に社交的 (Social) でないという点が気にかかる。

ここでもう一人の同じ立場の学生の場合を紹介したい。その人は既に学生ではなく教員の立場にあった。良く知り合った中なので、多少申し訳ない気持ちはあったが、提出期限などの制約条件もあり無理にお願いした。いつものように快諾して、設定した日時にズーム (Zoom) で会おうと約束し、そしてその日が来た。10分や15分の遅れに至っても事前に連絡をしてくるその先生の対応には驚きであり、その誠実さに感心させられる。そして講演発表のための録画セットが終わり、録画が始まり、2時間ほどでそれは終わった。「長い時間を無駄に過ごさせた事」への詫びを言うと「2時間にわたり先生の講義を聴くことができ大変楽しかった」という返事が返ってきた。例えお世辞であっても嬉しい返事である。前者の学生が2時間近くの間別室で眠っている状況と、その同じ時間、気力を集中さ

せて講義に耳を傾ける姿勢の違いに、大きなモチベーションの差を見ることができた。この両者の対応の違いに「これだ」と思わず何か新しい物を見つけた様な気持ちで「やった」という充実感も同時に味わうことができた。ビデオ動画創りという同じ仕事を、同じ技能で仕上げる間の時間の利用法に於ける積極的な対応がモチベーションのアップにもなるが、逆に「モチベーションなしと言う評価にもなる。かたや学生、もう一人は教員と言う立場の相違はあるが、ちょっとした平素の心構えの違いが、時間の経過と共に大きな差を作ることになる。どこまで議論しても学生自身にやる気が無く、ちょっとした部分で、そうした気分にならないとモチベーション・アップの瞬間さえも逃す。同じ能力を有していても差が出るのはこのような心得の差と言えよう。「夕食を馳走になると言う」だけで無く、新しい人との出会い、新しい知識の入力、新しく人を知ることによって別の世界を垣間見る、などの好奇心、知識欲、興味、関心を持つことが重要であり、謙遜だけが美德ではない。感謝の気持ちがあるなら、それをさらなる好機に変える努力を持って欲しい。

別の例を示す。筆者を訪れた卒業生に、会社に返ったら御社のCEOの一人によろしく伝えて欲しいと言うと、「とんでもない、あの人は雲の上の人で、私如きが会えるレベルではない」と謙遜(?)なのか固辞する。筆者は「だから、わざわざ会う機会を作ってあげて居るのに・・・」と溜息が出る。上記した例と類似の例である。こうした姿勢や挙動が社交性を産まないし、ましてや国際感覚も育まない。洋式レストランでは、対面に座した客に胡椒や潮などの調味料をわざわざ「取ってくれませんか」と声を掛ける。こうして声を掛けることが、会話のきっかけを作り、その後のその人との展開の更なる機会となる。謙遜だけでは、社交性も、国際感覚も育成されないし、挙げ句の果てには「大海を知らぬ井の中の蛙に収まる」というプロセスを辿る大学は少なくない。積極性に欠ける姿勢、挙動は折角のチャンスをチャンスに変えることができず「逃がした魚は大きい」と後悔しても後の祭りとなるから注意を要する。本来なら危機すらチャンスに変える積極性があっても不思議ではない。それには招待する側と招待される側の両者が居るわけであるから、招待される側にモチベーションがないと言うだけでは無く、モチベーションを上げる機会を適宜与える必要がある。相手が理解できなければ、その意味、意図を直接説明してやることも必要である。それも教育である。

モチベーションが高いかどうかは、知りたい、何かしたい、或いは具体的に成し遂げたい目標、ターゲット、知識欲、勉強意欲、好奇心が積極的にある場合を言うが、そうした申し出、挙動、姿勢が見られない場合、モチベーションは低いと判断するのが一般的である。本人にその気が無いのに敢えて押しつけがましく、迫るのは相手も迷惑で有り、やる機を無くし、嫌いになると言う逆効果も手伝い、返ってモチベーションを下げる事にもなりかねない。筆者は自分の事を棚に上げて、他人を、或いは学生の姿勢を批判するわけではないが、エレベータ内などで数人の学生に取り囲まれた場合などに、こちらから積極的に挨拶をし、「英語は話せますか?」と尋ねると「少しは、A little」と言う返事が返ってくるがそれ以上はない。「少し」という量がどの程度かを推し量ることは難しいし、個人に

よりその量は異なる。かつては大学院生の数名が「英語論文のプレゼン能力を向上させたい」という事で、申し出が有り、毎週1回の割合でPPTを用いたプレゼンに参加し、助言などをしたが、モチベーションが高いと言うことで謝礼は不要、無料でと言うことで始めたが、長続きはしない。3ヶ月ほどで依頼してきた側が来なくなる。飽きが来たのか、疲れたのか、はたまた無料だから、つい欠席しても大したことは無いと言う安易な挙動になるのか、その判断は難しいが、親切心が通じていない行動が後日現れることが多く、失望させられる。この時はしばらくして、欠席して申し訳なかったと言う事で、お詫びの品を持っていくらかが挨拶に来たので、まだしも許容範囲であったが、そうでない場合は、断ち切れていつの間にか来なくなるという場合もある。筆者自身について言うならば15年以上もタイに居ながら「タイ語ができないとは、どう言うことか」とよく言われるが、外国人のタイの大学での雇用契約は基本的に1年で、どうせタイ語を勉強しても1年後にはどうなるかわからないと言う、不安定な立場を説明して、その質問を切り抜けてきた。また英語で「貴方は長年タイに居たのだから、タイ語は完全にできるでしょう」と言われるが、その時の答えはジョーク(冗談、Joke)を交え、如何にも流ちょうにタイ語が話せるかの如く見せて於いて、[Of course, completely not] (もちろん、全くできません)と言って切り抜けてきている。タイ語が話せることは授業でタイの学生によりわかりやすく授業ができるという点では必要、且つ重要な事ではあるが英語ができればそれで十分ではと言う感覚と、英語とタイ語を比較するとやはり英語の必要、重要性の方が、タイ語のそれを上回るからである。いわゆる英語の優先度が優っているからである。チェンマイは観光業も大きな収入源で、多くの観光客が界外から押し寄せる。観光客を相手に英語を話す機会は多いかと想われるが、観光客の数が少ない場合は、英語を話すにも容易に見つからないし、探す努力を必要とするが、観光客の数が増えると逆にその必要性が無くなり無理して英語を勉強しようと言う気持ちもそれほど高くなる。まあこれが現在の大学生のモチベーションのレベルと考えている。

<参考資料>

<https://drive.google.com/file/d/1-F7jloVAr0FKADSggmpgkSdrv4Y7HAJx/view?usp=sharing>
<https://docs.google.com/presentation/d/1-LT-RUioflu3MKo0e3szOU1NX2ZZi73v/edit?usp=sharing&oid=102697071813213304220&rtf=true&sd=true>